

The Danube Quarterly

ドナウ通信



2007(平成19)年・新春号



ハンガリー日本人会会報 / The Japanese Community Bulletin



January

S	M	T	W	T	F	S
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

February

S	M	T	W	T	F	S
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28			

March

S	M	T	W	T	F	S
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

Cover Illustration Copyright © 2007 by Inner Design Bt, Budapest
Photo copyright © 2007 by Tamás Kármán
Edited by Tsuneo Morita
Published by Japanese Community in Hungary

目次

新年のご挨拶

運動部情報

運動部活動報告

ランニング部…多様化した参加者

自分でも驚くマラソン大会への出場

減量高じてランニング・レースへ

フルマラソン恐るべし

二〇〇六年釣り部活動報告

テニス日曜午後の部活動報告

ゴルフ部活動報告

プロゴルフファア

ソフトボール大会報告

運動会報告

鍋倉 真一

1

飯尾 欽哉

2

盛田 常夫

3

木村 晶子

4

西田 友実

7

飯川 浩二

9

関本 正

12

盛田 恒平

13

野村 尚史

15

荻窪 光夫

16

守谷 幸治

18

鏡 智明

18

日本人学校

第二七回海外子女文藝作品コンクール入選作品

鬼丸祐輔・沼田尚子・飯川 遥・堀部晋平・堀部和加奈・小松 幹

「ドナウ祭」作文

久世優美子・兼子健汰・三代鳴美・八代 大成

みどりの丘日本語補習校

児童作文 茂木 陸・ラパいのりゆき・山内規世美

随 筆

追悼 ジョージ・シャンドール

石本 裕子

28

日本の出版事情…「コルナイ自伝」刊行余話

盛田 常夫

30

創 作

第七話「しろ・と・くろ」

岩井 孝博

34

事務局便り

38

新年のご挨拶

日本人会名誉会長 鍋倉 眞一

明けましておめでとうございます。皆様良いお年をお迎えのことと存じます。私もブダペストで初めてのお正月を妻と迎えました。日本にいる時はクリスマスをあまり意識せず、お正月休みをのんびりというパターンに慣れておりましたので、当地ではクリスマス休暇も結構休み、その上お正月休みもということで「のんびりのダブル」を味わいました。

こちらに参りました一ヶ月ちよつとですが、その間に日本では想像もしていなかった日本とハンガリー両国の絆の強さを二度経験しました。

一つは昨年一二月に行いました天皇誕生日のレセプションでのことです。ハンガリー側のお客様の中に日本語を話される方が大変多いのにびっくりいたしました。「日本大好き」という方も相当おられ、合気道の先生やら、和服を着た男性もおられました、

裾野の広さに感服しました。

二つ目はソルノク市で行われた「テイサ舞踊団」結団六〇周年記念公演を見学した際のことです。ハンガリーの民族舞踊を見たのは初めてでしたが、男性の激しい動きに圧倒されましたし、女性の衣装の素晴らしさに目を見張られました。舞台が熱狂のうちに最終段階を迎えた時に、日本の山形県遊佐町から贈られました「祝ティサ舞踊団結団六〇周年」と日本語で書かれました大漁旗が披露されました。同町はソルノク市と二〇年以上の交流があり、今では姉妹都市になっています。私自身はと申しますと、まだブダペストすら右も左も解らないという情けない状況であります。購入予約をしました車が参りましたら、早く自分で運転をして道を覚えようという気はあるのですが、如何せん六〇歳にして右側通行に慣れるだろうか、曲がりくねった道を覚えられるだろうか、読めないハンガリー語しかない高速道路

を走れるのだろうか等と今ちよつと怖じ気がついてきます。

でもそれではいけません。いろいろな面で早くハンガリーに慣れ、両国間の政治、経済、文化等の交流の絆をさらに強めるお手伝いを少しでもできればと思っております。

今年は小泉総理とジュルチャーニ首相との合意で始まった日・ハ協力フォーラムの最終年に当たっており両国の協力で実りある成果を達成できればと思っております。

また再来年の二〇〇九年は日・ハンガリー間の外交関係樹立一四〇周年、外交関係回復五〇周年という記念すべき年に当たっております。来年のことでも鬼が笑うのに、再来年のことをしかも正月早々と思われるかもしれませんが、今から両国で準備を始めても少しも遅くはありません。

これらの節目で両国の絆を一層高めることができればと考えますので、皆様のご指導、ご鞭撻をお願いします。

運動部情報

二〇〇六年度 日本人会運動部

活動報告

運動部長 飯尾 欽哉

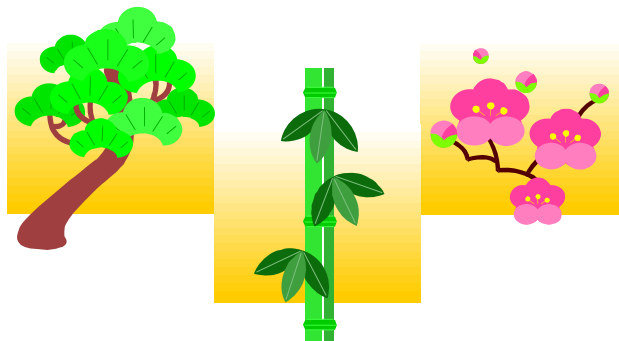
日本人会のより一層の活性化を目指して、従来からの「運動会」、「ソフトボール大会」に加え、二〇〇六年より「テニス部」、「ゴルフ部」、「ラニング部」、「釣り部」を日本人会運動部に加えました。その活動内容等は次稿のとおりですが、本年度の各種運動部の行事が無事に終了したこと、各役員・委員の方々、各部長・幹事さん等、多くの関係者のご尽力とご協力のお陰と思います。この紙面をお借りし厚く御礼申し上げます。ありがとうございます。尚、上記各部に加え、部の新設希望等がありましたらお気軽に小職宛ご一報ください。

世の中を少し見回してみますと、

やれ勝ち組みだの負け組だのと、その格差は徒に拡がるばかり。何ともやりきれない思いがします。連日連夜、汗水たらして働き詰めなのは日本人ばかり・・みたいな気がするのですが、気のせいでしょうか？ せめてプライベートな時間ぐらいは好きなスポーツで汗を流して、日頃の精神的な疲れやフラストレーションを取り除くようにしましょう。二〇〇七年度も会員の多くの方々の各種運動部行事への参加をお待ちしております。

日本人会に「運動部」があるなら、「文化部」みたいなものがあったも良いですね。お茶、お華、音楽、工芸、等：、どなたか「日本人会文化部」創立の名乗りをあげてみませんか？

必ず勝てる「カジノ研究会」なんていうのは、やり過ぎですかね。



ランニング部

多様化した参加者

盛田 常夫

先号でお知らせしたように、ブダペスト国際ハーフマラソンに六名の在留邦人が参加するなど、ランニング人口が確実に増えていきます。リレー競技にはハンガリーの友人や知人を誘って、日本・ハンガリー友好チームを作って参加しています。

年齢的にも、小学生から団塊世代間で散らばっており多彩ですが、女性の参加者が少ないのが残念です。ジョギングされている方は、是非、ハンガリーの和気藹々とした競技会に参加されてハンガリー生活の新しいページを開いてみてください。

今年二〇〇七年は、四月二二日のT・C・O・M主催の「ヴィヴィチッタ」で幕開けします。マルギット島から街の中心部を駆け抜ける一二km走

です。六・五kmの短い競技もあります。

この一週間後の四月二九日に、ウィーン国際マラソン大会が開催されます。フルマラソンとハーフマラソン、ジュニアの四kmマラソンが同時開催されます。ウィーン最大の競技会で二万人の参加者がいます。これに参加する人のお手伝いもします。

五月六日には、ブダ丘陵を走るハーフマラソン、リレー大会があり、一九日に恒例の女子六km大会があります。

六月三日は、K&Hのマラソン・リレー大会です。今年度もハンガリーとの友好チームを構成して参加の予定です。六月一〇日には、一〇kmタイムレースがドナウ河沿岸道路で開かれます。

九月二日に国際ハーフマラソン大会、九月三〇日に国際マラソン大会、一〇月一四日にコカコーラ女子一〇kmが開かれます。



ウィーン国際マラソンの出発風景

一〇月二三日には、ウィーン・ブダペスト・スーパーマラソン最終区間で、国際ハーフマラソン大会が開かれます。

日頃から一〇km程度の距離をジョギングしている人は、是非、四月末のウィーンハーフマラソンを目標にしてください。コースも街中の応援も非常に雰囲気の良い、世界でも屈指の大会です。

自分でも驚く

マラソン大会への出場

木村 晶子

四月のT・C・O Mレース、六月のK & H ハーフマラソンリレーに続き、一〇月一五日のブダペスト国際マラソンのリレー種目（アンカーで八・三 k m）、そして最後に一〇月二九日のコカコーラ女子（一〇 k m）に参加した。まさかハンガリーに来て一〇数年ぶりにランニングを再開し、マラソン大会にまで出るとは夢にも思っていなかった。いつの間にか、気がついたら一〇 k mの距離を完走してしまった。実は家族の誰よりも、私自身がこの事実が一番驚いている。

走り始めたきっかけ

走るきっかけになったのは、今年から始めたジム通い。二〇〇五年八月、主人に帯同してハンガリーに来たのだが、食生活の変化、運動不足

などで徐々に体重が増えていった。これはやばいと本気で思い、週に一度、子供をベビーシッターに預け、他の日本人の方とジムに通い始めた。主にエアロビクスのクラスに参加し、その後少しだけステップ（足を左右交互に動かす運動器具）をしたり、マシーンでトレイニングしたりした。気分転換にもなるし、体を動かすと気持ち良いし、初めはこれで十分満足していた。二月か三月頃だっただろうが、日本人会からの手紙で「ランニング部の本年度の参加予定レース詳細」なるものを見て、「九月頃のレースなら間に合うかも」と一念発起し、盛田さんに参加の意思を連絡した。すると盛田さんから「四月に三・六 k mのレースがあるから出てみたら」と返事が返ってきた。予想外の早い時期に、「えっ！？」と声をあげて驚いた。しかし、週に一回のジム通いのおかげで、少しずつ体力が付き始めていたこともあり、少

し悩んだあげく、思い切って四月のT・C・O Mレース三・六 k mに参加することを決めた。これを手始めに、距離は月ごと大会ごとに、三・六 k m（四月）↓七 k m（六月）↓八・三 k m（一〇月）↓一〇 k m（一〇月）と少しずつ伸びていった。最後に一〇 k mのタイムレースを完走したことは、来年につながる大きな自信になった。

マラソン・リレー

一〇月一五日のブダペスト国際マラソンは、四二・一九五 k mを五人でつなぐリレーの部に出場した。私は五区（アンカー）の八・三 k mを走った。レース当日、陽射しは強いものの風が冷たく感じられた。私が走るコースは鎖橋から河沿いを国会議事堂方面へと進み、マルギット橋から環状道路に上がり、西駅手前の高架橋を上って下って、ウエストエンドの脇を通過してドージャジョルジ

ユ通りに入り、英雄広場後方にセツトされたゴールまでのコース。途中、西駅手前的高架橋を上り下りする際に「なんだかこの雰囲気（全然スケールは違うけど）箱根駅伝みたい」と、ひとり勝手に想像していた。

四区の西田さんからタスキならぬ測定チップを受け継ぎ、勢い良く走りだした。私の走りの基本は、盛田さんからのアドバイスに従い「前半押さえ気味でゆっくり、後半余力があればがんばる」なのだが、気づいたら三kmまでを一km四分五〇秒のペースで走っていた。このままでは後半もたないかもしれないと思い、少しペースを落として走り続けた。

五kmを過ぎたあたりから、「んっ！？体がおかしい！」と体調不良に気がついた。腹痛は徐々にひどくなり、何度も「もう歩こう、もう止まろう」と冷や汗をかきながら思った。しかし、「リレーのアンカーだから、私が止まってしまえば一区から

四区までタスキ（チップ）をつないでくれた人のがんばりが無駄になっってしまう。それは悔しい。苦しいけど絶対ゴールしよう」と気を取り直した。六km過ぎからは時間との戦いではなく、腹痛との戦いになった。息は上がっていかないのに、スピードを上げることが出来ない。一km毎のタイムはどんどん遅くなっている。ほんとに我慢のレースだった。力を出し切れなかったことがほんとに悔しかった。でも、ゴール出来たときは、責任を果たせただけでなく、長い距離を走りきった満足感が湧いてきてほっとした。

初めての一〇km

ブダペスト国際マラソンが終わり、二週間後のコカコーラ女子一〇kmに向けて、トレーニングを再開した。週に二回、初めて挑戦する一〇kmレースに向けて、ジムのランニングマシンで六〜八kmを走った。ス

ピードはともかく長い距離を走れるだけの体力と自信をつけたかった。一〇月二十九日のコカコーラ女子は朝からあいにくの雨。時折強く降り、気温も低く、最悪のコンディションになることを覚悟した。とにかく体を冷やさないようにしようと思い、四枚重ねの重装備で家を後にした。幸いなことに会場のマルギット島に着くころには雨は止んでいた。これはラッキーだった。一二時のスタートを前に体を温めるために軽くアップし、スタート位置に着いた。参加人数（八三二名）は思いのほか少ない感じがした。開催日時の変更と天候が影響していたのかもしれない。





ゴールの瞬間

一二時にピストルの合図でマルギット島をスタートした。周りが思いのほか飛ばしている感じがして少し焦ったが、私はあくまでも自分のペースで前半は抑えてゆっくり走ろうと気持ちを切り替えた。走っていて予想外だったのが、五k m地点まで一k m毎の表示がなかったことである。一k m毎のタイムはだいたいのペースの目安になるのだがないものはいやがないと思ひ、感覚で走った。五k m地点で時計を見ると、確か二六分三〇秒〜二七分弱位だった。

前半は抑え目にゆっくり走ろうと思っていたので、結果的にちょうど良いくらいペースで走れていたようだ。後半アルパード橋から鎖橋に向かうコースは直線が多く、先が見えるのになかなか着けない感じがして辛く感じた。途中のマルギット橋を通るところで主人と子供が応援してくれた。こういう応援があると嬉しい。頑張ろうという励みになった。

七k mを過ぎたあたりで少しペースを上げた。すると同じようにペースを上げたハンガリー人の女性がいるので、離されないようにいついていった。八k m地点で少し苦しかったが、もう少しペースアップ出来る余力を感じたのと、ここまで走ってきたんだから負けたくない（自分自身と他のランナーに）というスポ根みたいなものが沸々と湧き上がってきて、それが疲れた私をゴールまで後押ししてくれた。マルギット島の陸上競技場に入り、ゴール直前で私の名前

がハンガリー語でアナウンスされたときは嬉しかった。

こうして私は一〇k mの距離を初めて完走することが出来た。タイムは五三分一九秒（ネット記録）。八三一人中一八四位だった。人生最初の一〇k mは苦しくもあり楽しくもあり、結果にも満足できるレースになったと思う。

四月の三・六k mから一〇月の一〇k mまで距離を延ばすことができて本当に自分で驚いている。大会参加に弱気な私にいろいろアドバイス下さった盛田さん、ありがとうございました。

そしてレース参加に協力してくれた家族にありがとうと言いたい。来年二〇〇七年四月に始まるレースに向けて、冬の間、自分のペースでトレーニングを続けていきたいと思う。



減量高じてランニング・レースへ

西田 友実

この一〇月、国際マラソン大会の駅伝リレーとコカコーラ女子（個人一〇km）の二つのレースに参加しました。九月に短い距離を走りましたが、ちゃんとした大会で走ったのはこの二つのレースです。国際大会と名の付くようなレースはもちろん、そもそもランニングの大会に出場するなど、少し前の私にとって想像もつかないことでした。

九月中旬、駅伝リレーへの誘いをいただき、慌ててトレーニングに取り掛かりました。ランニング初心者として走るのは楽しみでもありましたが、少しプレッシャーも感じていました。その後、コカコーラ女子（個人一〇km）の参加も勧められ、トレーニングにさらに気合が入りました。

一〇月一日に開催されるはずの国際マラソン大会は、市内の安全確保を理由に一五日に延期され、それに伴いコカコーラ女子も二九日に延期になりましたが、私にとってはトレーニングの時間が延長されました。トレーニング中、腰の痛み等のトラブルもありましたが、仕事中は湿布薬を貼ることでもなんとか乗り切り、本番は二つのレースとも、目標タイム内で完走することが出来ました。

ランニングを始めた動機

私がランニングを楽しむようになったのは数ヶ月前のこと、ダイエットを決心したことに始まります。ブダペストに滞在し始め、日に日に増加の一方を辿る体重に歯止めをかけるため、真剣にダイエットを決意したのです。しかし、食べるのが大好きな私に食事制限など出来るはずもなく、そこで初めてランニングを始めることに決めました。道具も頭も

使わず、手っ取り早く始めることができるスポーツはランニングだと思ったからです。

しかし、ランニングは予想以上に大変なスポーツでした。最初は二km程度のジョギングで苦しくなり、三kmを走るのも死に物狂い。息を切らしながら「痩せるため」と自分に言い聞かせてとにかく必死に走っていました。

それから徐々に距離を延ばし、五km、六km程をなんとか走れるようになった頃、同僚からロードレースに誘われ、参加しました。鎖橋の袂からスタートする夜の大会で、六・五kmの距離でした。私にとってデビューとなったその大会は、最高に楽しいものでした。レース中、強力なサポーターがいてくれたことが私の大きな支えであったのですが、加えて友人達の声援やブダペストの美しい夜景は、さらに気分を高めてくれました。完走後は何ともいえない

い充実感と爽快感を体験しました。
この時から、ダイエツト抜きで純粹にランニングを楽しむようになりました。

駅伝リレー

一〇月一五日、駅伝リレーの朝、インターコンチネンタルホテル前に集合しメンバーの顔合わせとゼッケン等の受け取りをしました。私が担当する区間は鎖橋ブダ側から自由橋を渡り、鎖橋ペスト側までの六・三kmの第四区間。目標タイムは三五分以内と自分で決めていました。

第三走者から「たすき」ならぬ測定チップを受け取ったのは、太陽が燦々としている一二時過ぎ。そこから、今までに無い辛さを体験しました。走り始めてすぐに汗が流れ、体のだるさを感じ、息苦しくなったのです。思えば、トレーニングはいつも仕事の後にするか、週末はフィットネスクラブでのトレーニング。日

中に屋外で走ったことは今までに無く、太陽の下で走ることにまったく慣れていなかったのです。だから、太陽対策などは考えておらず、帽子すら身につけていませんでした。またともに日光を浴びながら走りました。とにかく辛くて、暑くて、苦しくて、日光がどれだけ体力を消耗させるかを痛感しました。

次の走者にチップを託したときはフラフラで、励ましの一言すらかけられませんでした。実際、走っている間は景色を楽しむ余裕すらなく、目標タイムぎりぎりですら六・三kmを走りました。

次の大会は天気や気候も十分考慮しようと思いましたが。二週間後に控えているコカコーラ女子もスタートが正午のため、日光対策が必要だと思ったのです。

コカコーラ女子

二九日、コカコーラ女子大会当日、

朝はあいにくの雨模様。前回の反省を踏まえ、当日の気候と天気を十分考えたウェアを着用し、スタート地点のマルギット島へ向かいました。幸い雨は止み、体調も悪くなく、いい緊張感に自分を持っていくことが出来ました。

目標は一〇kmを一時間以内でゴールすること。コース前半は慌てて駆けだしてはいけないという忠告を守り、落ち着いてスタートを切り、気負わず走り始めました。ちょうど半分の五km地点でストップウォッチをチェックしました。三〇分弱の表示を見て、「この調子なら一時間以内で走ることが出来る」と確信しました。

しかし、さすがに途中の七km八km地点で少し疲れが出てきました。周りにも歩いてしまっているランナーがちらほら見えてきました。皆も同じように疲れていたのでしょう。そんな彼女達を「ハイラ！（が

んばれ」と声を掛けて通り過ぎるランナーを見て、なんだか私まで奮起

され、気を持ち直して少しペースをあげて走ることができました。そのままペースを崩さずゴールし、チップ測定（ネット記録）で、五六分三〇秒で完走しました一時間以内に走りきれば立派だと言われていたので、やり遂げたという気持ちになりました。メダルを首に掛けてもらった瞬間、言いようのない爽快感と達成感を味わいました。途中、少し苦しい所はあったけれど、快適にこのレースを走ることが出来ました。この爽快感は走った者だけが味わえるものだと思います。

この二つのレースを目標タイムで走ったことで、大分自信がついたような気がします。これからは「ランニング初心者」を卒業し、ハーフマラソンに参加できるように頑張ろうと思います。それが新しい年の目標になりそうです。

フルマラソン恐るべし

飯川 浩二

ドナウ通信秋号で、大言壮語して臨んだ今回のフルマラソン。二〇〇六年十月十五日は八年前の苦い思い出を払拭し、私の新たなマラソン人生の幕開け、記念すべき日となるはずであった。そう、はずであった：なのである。ここから先は私にとつては思い出すのも辛い記述となる。気の毒で読めそうにないという方はこの辺で次の作品へどうぞ…。

さて、フルマラソンの厳しさを知る最初の洗礼を受けたのは八年前。東京都荒川の河川敷であった。結果は最悪。若気の至り、オーバーペースが原因で途中から足が上がらず走り続けることができなかった。四時間でなんとかゴールしたもののそれ以上足が動かず、帰り道で入ったラーメン屋でビールを飲んだの

が最後、筋肉が硬直し地下鉄に乗るのに階段が降りられなかったのを心の傷みとともに今でも覚えている。手すりを磨きながら横向きに進み、蟹か亀かという状態でなんとか家までたどり着いた。こんな体をこわしかねない競技は二度とやるまいと心にかたく誓ったものだった。

しかし歳月とは恐ろしいもので、その時の辛い記憶はいつの間にか心のどこかに封印されてしまう。九月のハーフマラソンで好調であったことも後押しして、「ここブダペストでフルマラソンにリベンジ！」の思いを強くした。調べてみるとコースもハーフマラソンとほぼ同じところを二周するというもの。これはいける！とインターネットの参加申し込みサイトを開いた次第である。

しかしよくよく振り返ってみれば暗示はあったのである。当初フルマラソンは十月一日に予定されて

いた。がしかし、みなさんもよくご存じのように、この年の秋はジュルチャーニ首相の発言を巡る問題で街のあちらこちらで暴動が起こっていた。いざサイトを開いてみると通常とは違い申込みがクローズされている。だがこんなことでは一度高揚した私のやる気は収まらなかった。勢いとは恐ろしいもので、直接メールで大会委員会に問い合わせ、拒絶されると今度はFAXでも参加申し込みを送付した。数日後大会延期のメールが届いたのだが、今思えばこの辺で考え直せばよかったのだ。自分の力の過信はデモの影響だけでは自覚されることはなかった。大会が延期されればそれだけ練習時間が増えるなどと余裕まで出てきた始末。

ところが実際は(今となっては言い訳にしかないが)、ハーフマラソンの後日本人会共催の運動会があり、前期評価の時期とも重なっ

てなかなか練習する時間が取れなかった。日が落ちるのが早くなってきたこともあり帰宅後の走り込みはほとんどできず、この二週間の延期はかえって大きなマイナスになりしまったのである。数少ない走り込み(?!)といったら小学部三・四年生の体育の毎授業で取り入れている「六分間走」のみ。子ども達の倍近いスピードで走って距離を稼いでみたものの、いくらがんばっても2km弱。フルマラソンの練習というにはまったくもってお恥ずかしい。

そうこうして不安を残しながら迎えた大会当日。結果は初フルマラソンと全く同様、途中で足が上がりなくなり幾度も歩いてしまった。四時間十八分というなんとも残念な記録であった。思い出すのも悲しい現実ではあるが、己の甘さを知るためにもレースの様子を再現し書き

記そうと思う。

そもそも五キロ付近で背中に風船をつけて走っているランナーを見つけたことから悪夢が始まる。変な格好で走る人がいるなあと思いきや彼の正体は三時間三十分で走るペースメーカー。「あの人についていけば三時間三十分か。自分の時計を見なくてもいいなんてラッキー」。私の過信は留まるところを知らなかった。それが運の尽き。八キロ地点でちらっと時計を見たら一キロ四分四十秒くらいのペースで走っていることに気づいた。予定のキロ五分、九月のハーフマラソン時よりもずっと速いペースである。ちょうどそのころから横腹に少し痛みを感じ始め、足も心なしか筋肉痛になってきたりして、この先まだ三十km以上あるというのに先行き不安なコンディション。気づいたら、ゆらゆらゆれる風船もあつという

間に人混みに消えてしまっていた。

コースはマルギット橋周辺を三度通過する設定になっており、そこが妻と息子の応援ポイントだった。実はフルマラソンに出場するにあたって家族には「前回のようには絶対に歩かない」と宣言していた。第一ポイントは一ハーフ前。既に足にかなりきいている状態だったが、無理して余裕の顔をつくって通過。第二ポイントはオーブダを回ってハーフを少し越えたところで、実はもうこの時既にかなりペースが落ち次々に抜かれてしまっていた。家族が少し不安げな表情を見せているのがわかった。最後の第三ポイントはゴールまであと七kmくらいの地点。足の痛みだけなら走り続けられると思うていたが、二十七kmを過ぎたところから腰にもだるさが襲ってきて、「給水所だけは歩いてよし」という勝手な決まりを作った。ある給水所では水を一杯、カットバナナ二

個、ラムネ二個、レモン一個、スポーツドリンク一杯、そして更に水一杯を飲み、時間をかけて休憩してしまった。そして一度ゆるめた気持ちを元に戻すのは大変で、すぐに給水を所以外でも歩いてしまった。家族が見ているところはがんばって走り見えなくなれば歩こうと、ほとんど最後の力を振り絞って三回目の家族の前へ。ここでなんと息子が大声で「ガンバレ〜」と言いながら併走し始めた。足を前に出すのが精一杯の私の横を全速力で…。周りで応援している人達からも「ヤパーン！ヤパーン！」という大合唱。予期せぬ出来事にほんの少し力が湧いたが、「（お願いだから）ここまででいいよ」と小声で息子に伝え、なんとか国会議事堂前のカーブで身を隠すことができた。

やっとの思いでゴールにたどり着き、完走（？）賞をもらった。余談ではあるがこれはなかなか豪華

であった。お菓子にバナナ、Tシャツ、帽子さらには缶ビールまでもが入っていた。倒れるように近くの芝に腰を下ろし飲んだビールが傷心にしみた。フルマラソン恐るべし。

大会後、結果は即日インターネットに掲載される。ところが私の記録が表示されない。たとえひどい記録であつても、さすがになしにされては困る。何日経つても掲載されない。でメールで問い合わせたら、担当がバカンス中なので掲載まで一週間かかると言われた。最後まで思い通りにいかないマラソンだった。

さて、こんなに辛い思いをしたのに、それでもきつと数年後にはまたフルマラソンに再挑戦している自分がいる気がする。今回は「フルマラソン二度と走るまい」ではなく、こう誓いたい。

己の甘さを自覚し、日々精進。

釣り部二〇〇六年活動報告

関本 正

ひよんな事から発足してしまいました釣り部ですが、部員数の低迷、部長の役不足のせいで釣り方・釣り場所が限定されている、といったハードルを乗り越えつつどうやら年を越すことが出来ました。皆様のご支援に感謝申し上げます。

さて、昨年は次のような活動をしてまいりました。

五月二六日：釣り部発足、活動検討会
六月一七日～一八日：第一回釣り部釣行（オーストリア Etrachsee\爆釣の湖でのイワナ釣り）

八月二六日～二七日：第二回釣り部釣行（Etrachseeでのイワナ釣り）

九月九日～一〇日：第三回釣り部釣行（Etrachseeでのイワナ釣り）

一〇月二一日～二二日：第四回釣り部釣行（Mur川での虹鱒、グレイリリング釣り）

一二月一四日：釣り部忘年会

釣行は風光明媚なオーストリアはシュタイヤーマルク州のムーラウ（Murau）近郊で行い、楽しい夕食付きの一泊二日で行いました。オーストリアの地元の人達も変な日本人の釣り師が押しかけて、さぞかしびっくりした事でしょう。

部長以外全くの初心者として六月の初釣行に臨んだメンバーも、四回の釣行を経て、毛鉤でウブな溪流魚をいじめる悪い人達に成長致しました。これからの更なる成長が楽しみです。

オーストリアでの釣りには「釣り免許」が必要で、これを取得するにはドイツ語でペーパー試験を受ける必要があります。メンバーで「免許」を持っているのは部長だけなので、これまで免許の必要な場所に限定して釣行会を行っておりますが、その釣行会とは別に部長はハンガリー国境に近いオーストリアの行きつけの溪流で毎

月虹鱒・川鱒（ブラウン・トラウト）釣りを楽しんできました。昨年の最大魚は残念ながら四四cmで終わってしまいました。今年は気合を入れてもっと大型を狙います。

釣り部の今年（二〇〇七年）の活動計画ですが次のような事を考えております。

一月～三月：釣り部スキー合宿（適宜開催）

一月～二月：希望者あればオーストリア釣り免許取得セミナー（試験は二月下旬）

五月～一〇月：毎月必ず一回釣行会（場所は爆釣の湖、Mur川での鱒釣りを中心に適宜検討）

一二月：忘年会

その他：希望者には毛鉤作りセミナーも適宜開催

新入部員大歓迎です。メンバー一同ご連絡をお待ち致しております。

テニス日曜午後の部活動報告

盛田 恒平

九月より幹事に着任した盛田です。「マラソン部の盛田氏がテニスにも進出!？」と思われる方も居るかも知れませんが、別人ですので悪しからず(身内ですが)。今後とも宜しくお願い致します。

昨年は、一二月まで近年稀に見る長い秋でしたが、いよいよ本格的な冬の寒さの到来となってきました。外の寒さとは裏腹に、我々日曜午後の部はブダペストテニスの風物詩とも言うべき白いテントのドームコートにて毎週熱い(?)プレーに楽しく汗を流しています。さて、本題ですが、表題の通り二〇〇六年を振り返ってみたいと思います。

メンバー帰任と庭球部の危機!?

まず、昨年はメンバー六名でのスタートでした。しかし、三月にアン

ダーサーブ(何故か打ち辛い)が印象的であったN島さんがイギリスへ転任され、九月に週末庭球部士・日曜

部きつてのスピンスーブとネットプレーの達人、最年少エースのI原さんが帰任された為、ついに四人ぼつきりという状況になってしまいました。全員揃ってようやくダブルスが出来る状態です。以前のドナウ通信ではダブルスをやっているという紹介でしたが、九月からの秋冬期ではメンバーの時々都合により、四人が揃う機会が僅か三、四回程という散々な結果になってしまいました。

一部で土曜部との合併も囁かれましたが、そこは庭球部のOB達が長年築き上げてきた伝統を重んじる茂木氏の一喝により、独立した存続を続け現在に至っています。ことに最近では、部員が少ない事の副産物で「シングルス熱」がメラメラと燃え上がってきて、出席者が二名の場合は部員の間で「デスマッチ」と呼ば

れる二時間ぶっ通しのシングルスマッチが繰り広げられます(正直疲れます)。

新入部員は勿論大歓迎です!シングルスもダブルスも、余裕をもってやりたいものです(五人揃うとダブルス試合中一人は休めます)。

テニスコート変更

今年になって大きく変わったのはコートが移った事でしうか。今までは、山の手のセーブルジコートで続けておりましたが、コートファイが断続的上昇し、今年の夏に限っては室内の絨毯コートから、外のクレーコートへ移り活動をしていました。しかし、流石に冬のコートはメンバーが少ない上に暖房費が嵩むので、土曜部、日曜部(午前)が使用しているヴァーロシユマヨルのコートへ引越す事となりました。

ただ、場所が変わって、コートの種類もハードコートに変わりました。

テニスにとって、コート・サーフェスの違いは非常に大きなファクターです。サーフェスが違っていると、玉の弾みやスピードも違ってくるので、打球のタイミングが異なります。慣れたサーフェスから、別のサーフェスに慣れ親しむまで、かなりの時間が必要ですし、人によって好みも違います。

ハンガリーでは、一般的に土のクレイコートが主流とされています。我々はカーペットとクレイの両方でプレーしてきたので、ハードに変わっても球の緩急には対応できました。逆に、クレイと違いイレギュラーも少なく有難いのですが、コンクリートが土台になっているハードコートでは、遠目の球を滑り込んで取ることが出来ません。足の運びも制約されるので、足への負担が増し、より敏速なフットワークが要求されます。この面は良いレッスンになると思っています。コートが変わることによ

ってプレースタイルも変わるのでしよう。日本ではちなみにハードコートが主流です。

プロの世界では、ハードコートで強い選手がクレイの大会で優勝するケースは少なく、現在三年連続世界ランキング一位のロジャークレー・フェデラーでさえも、本年、全豪（ハード）、全米（ハード）、全英（芝）を制していますが、唯一のクレイコート大会である全仏の優勝を逃しています。異なるコートでの経験を積むことも、テニスを覚えていく上で必要なことです。

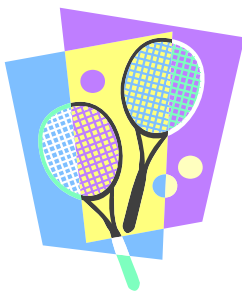
二〇〇七年には。。。。

昨年一月に、土曜・日曜部合同で一足早い忘年会を行いました。色々な話や意見を取り交わしていく中で、やはり日曜部のシングルス化が進みつつあることと、部同士の交流の必要性を改めて認識いたしました。以前は、「土日対抗戦」や皆さん

が集まってテニスで交流を行う「わいがやテニス」等、行事が盛んでしたが、ここ数年交流が乏しくなっています。

〇七年には、日曜午前の部も交え、交流戦を活発化し、〇五年に行われて大盛況だったのにも関わらず、その後ご無沙汰になっている企画「ブダペストオープン」を検討しています。

出来れば、近い将来、ウィーンやプラハ在住の方々との三都国際交流戦などと、勝手に抗争を膨らませていきます。テニスを通じて少しでも皆さんとの交流を深める事が出来れば幸いです。



ゴルフ部 ニ〇〇六年活動報告

野村 尚史

二〇〇六年は 各回二〇名を越える参加で、月例会八回（一―月度は悪天候の為中止）を開催。五名の方が 優勝カップに、新たに名前を残されました。

大吉さん主催マッチプレー選手権（四月―九月）も三〇名近い参加者で行い、優勝は島川さん（関西ペイント）でした。日本でなかなか経験できないマッチプレーにおけるゴルフの駆け引きを堪能しました。

また、団体戦においてもパンノニアゴルフコース主催、四地域対抗団体戦ワールドカップでは 前年度の三位から、わずか四打差の二位へ躍進、また、昨年、最下位に終わったジェットロ・カップでは、シングルハンディープレーヤーをそろえたチェコ・スロバキア・オーストリアチームを相手に見事優勝！いたしました。

『たかがゴルフされどゴルフ』、『楽しく、でも 真剣に』という会の趣旨のもと、日本人同士の交流はもとより、ハンガリーをはじめ多くの国のメンバーとも交流を深められた一年でありました。

会の運営にあたり、多くの方に一年間ご協力いただきこの場お借りして御礼申し上げます。

ゴルフ部 ニ〇〇七年活動予定

1. 新年会

一月二二日（日曜日） 三時より
『大吉』にて

2. 月例会

四月より一―月まで毎月

3. パンノニアゴルフコース主催

『ワールドカップ』参加

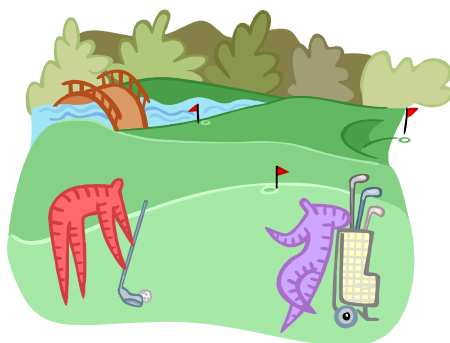
日本、欧州、韓国、その他地域
四地域対抗 団体戦

4. ジェットロ・カップへの参加

ハンガリー、チェコ、スロバキア、オーストリア国別対抗、団体戦

5. マッチプレー選手権

大吉さん主催（五月―八月）



プロゴルファー

萩窪 光夫

一昔前に社内アンケートで「中年の夢を語ろう」と言うのがあり、当時ゴルフを始めたばかりで興味深かった自分は『夢はプロゴルファー』とマジで書きました。それが社内誌に記載されるや否や上司、同僚などから「冗談、本気、気違い、会社人間失格、バカ」など罵詈雑言を至る所で浴びせられました。

「何に！そんなに言うなら芝生の上で決着つけようじゃねえか！」と勇ましく啖呵を切ったものの当時全くの素人、どうしよー、途方にくれました。一二〇を切った事など一度も無いのに勢いで大変な事を口走ってしまった。

それからは頑固者の一徹、寝ても覚めても毎日ゴルフ漬け、ゴルフ雑誌は五種類以上隅々まで読破、暇さえあれば何時でも打ちほうだいの練

習場、土日は雨でも台風でも槍でも葬式でもゴルフ場通い、庭はグリーンに改造、家では夜間練習の日々が過ぎて行きました。

でも、悲しいかなそこはやはり初心者何回やってもザックリ、チャックリ、ギッタンバッタン。俺には才能が無いのか、神も仏もアッラーもクリスマスもないのか！グレてやる！

家内と子供にはとつくに見放され、親戚と友人からは冷たい目で見られ、仕事でも「あいつに会いたきや近くのゴルフ場へ行け」と言われる始末。あゝあ、一体どうしたら良いのだろう。

プロゴルファーの夢は空しく散ってしまうのだろうか、そんなある日海外転勤の話がありインドネシアとの事、千載一遇、おゝ確かあそこはゴルフ天国かつ常夏だ、ゴルフが嫌と言うほど出来るぞ、何も考えず即OK。

ところが素質の問題か数打ちや当たる訳でもなく、中々上手くなりませんでしたが、漸くあまり迷惑を掛けなくて済む程度のスコアに辿り着きました。

ハンガリーでも日本人会ゴルフ部会に入会させてもらいましたが、同伴プレイヤーに迷惑掛けぬよう静かにそしてひそやかにプレー中です。皆さん宜しく。

今日も明日もザックリ、チャックリ、ギッタンバッタン、それでも何時でも何歳でも、俺にはでっかい夢がある。

夢はプロゴルファー。



第2回 中・東欧対抗 IETRO CUP 団体戦結果

順位	チーム名	メンバー	Gross	上位5名Gross
団体優勝	ハンガリーブダ	吉井（サンヨー） 長坂（デンソー） 太田（NTS） 飯尾（大吉） 岡崎（SEWS） 山田（クラリオン） 岡崎（TDK） 江森（ソニー） 的場（ベルハウス）	88 94 95 96 102 102 107 113 120	475
団体2位	チェコ	坪野（日特） 佐伯（アルプス） 伊藤（日特） 丸山（アルプス） 半杭（アルプス） 野村（PWH）	87 92 99 99 107 136	484
団体3位	ハンガリーペスト	長坂（学生） 海野（大使館） 三宮（大林） 松浦（スズキ） 宮崎（日清食品） 安東（ダイヤモンド） 石原（住商） 児玉（日清）	83 95 98 104 108 112 116 125	488
団体4位	オーストリア	望月（大使館） 石井 中川（Nichicon） 大島 谷元（松下） 山沢（松下）	92 96 101 102 103 104	494
団体5位	スロバキア	神谷（トリム） 牛田（ソニー） 鷺頭（大使館） 大橋（大成） 紺野（大成） 北川（竹中）	80 100 110 112 112 116	514

ソフトボール大会報告

守谷 幸治

ソフトボール大会実行委員会を代表しまして、本年度の活動報告、及び来年度の計画について報告申し上げます。

*二〇〇六年度活動報告

1. 春季ソフトボール大会の実施

五月七日に開催。オーストリア日本人会有志を含む百八十五名十四チームの参加をいただきました。優勝は三洋電機チームでした。

2. 秋季ソフトボール大会の実施

デモ騒動渦中の九月二十四日に開催。百二十二名九チームの参加をいただきました。優勝はA G C (A) チームでした。

*二〇〇七年度活動計画

1. 春季ソフトボール大会

五月十三日（雨天時は五月二十日

に順延）

2. 秋季ソフトボール大会

九月三十日（雨天中止）

来年も皆様の御参加を心よりお待ちしております。

運動会報告

鏡 智明

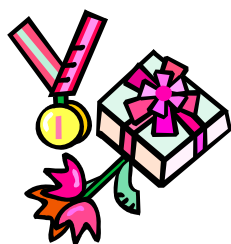
日本人会とブダペスト日本学校との共催になって第二回目の大運動会が、九月一〇日（日）に、晴天のもと、盛大に行われました。

日本人学校の生徒に、緑の丘補習校、ヴィラーニョシュの生徒たちも加わり、みんな一生懸命、競技を楽しんでいました。秋のドナウ通信で掲載された子供たちの作文からも、喜んでいる姿や悔しい思いがひしひしと伝わってきて、一人一人の思い出に残る運動会になり、大成功だったのだと思います。

また、先生、生徒父兄、一般参加の方々も、綱引き、親子二人三脚、障害物競走からリレーまで、休むまもなく参加競技があり、童心に戻って、子供たちに負けないくらい張り切っておられた方も多かったのではないのでしょうか。

来年は第三回目になりますが、日本人学校と共に、今年同様、皆が楽しめる運動会にしたいと思います。

最後に、朝の準備から、競技進行、後片付けまでお手伝い下さった日本人会商工会、日本人会事務局の方々、プログラム作成から競技指導まで親身になってお世話下さった日本人学校の先生方、本当にありがとうございました。この場をお借りしてお礼申し上げます。



日本人学校

第二十七回海外子女文芸作品

コンクール入選作品

今年は作品だけでなく、日本人学校教諭（兼子秀昭）による寸評も加えました。

作文の部

優秀賞

あきらめなくて本当によかった

小学部四年 鬼丸 祐輔

「ざんねんだけど、ノアはハンガリーにつれていけないかもしれない」

ぼくは三日ほど前にルーマニアからハンガリーにてんきんするところをお父さんから聞きました。数日

前はまだよかった。まだ、ノアを連れて行くことができないかもしれないことを知らなかったからだ。ノアというのはルーマニアで買ったオスのトイプードルで今一才だ。友達と別れるだけでも悲しいのにノアを連れていけないかもしれない。ぼくのむねは不安でいっぱいだった。けっきょくその日はすぐにベッドに向かったがそのことばかり気にしてなかなかねむれなかった。

次の日ぼくらは決心した。

「やれることはやろう」

まず、ぼくらはけんさをするために必要な血液をとりに行った。そしてぼくらはノアの血液を検査してもらったためにベルギーへ行くことになった。だがここで深刻な問題が生じた。なんと血液を三日以内にひやしてベルギーに持って行かなければならないのだ。ぼくらは血液をアイスボックスに入れて飛行機と

電車を使って行くことにした。そしてオランダのホテルに着いた。ねんのためにアイスボックスを見た。

「あー、どうしよう」

なんと氷がとけ始めていたのだ。ぼくはフロントに走った。

「氷ありますか」

ぼくはフロントにいる人に声をかけた。

「二階に氷ができる機械がありますよ」

その人の言うとおりでいった。ぼくは氷をもらいに行った。氷を入れながらぼくは言った。

「もうだめかと思った」

血液がある一定温度を超えてしまったら検査してもらえないのだ。

次の日、ぼくらは電車に乗ってベルギーに向かった。ベルギーに着いた。そして山の中の病院へ行った。お医者さんに血液をあずけた。

「もしだめだったらどうしよう」

と、ぼくが言っていたらお父さんは

「悪い方に考えるな。いい方に考える」

と、言った。ぼくは心配だったが、悪い方に考えるのはやめた。なぜなら結果がよくても悪い方に考えていたら結果が悪くなる、そんな気がしたからだ。あとは結果を待つしかない。

数日後結果が来た。ぼくはきんちようしながら結果を聞いた。結果は連れて行っていいそうだ。だけどノアは三ヶ月あとにならないとハンガリーに行けないのだそうだ。あきらめないといけないかもしれない。問題はその三ヶ月ノアがどうやってすごすかだった。なやんでいろんな人と相談してもらった。もとのメイドさんのエリザベスさんがあずかってあげるといつてくれたのだった。

「センキュー」

ぼくらは何度もエリザベスさんにお礼を言った。

そしてあつというまに旅立ちの日。旅立ちの日、ブカレストのホテルでノアをエリザベスさんにあげた。

「ノアをよろしくおねがいします」
ぼくらは言った。ノアはちよつと不安そうだった。

「じゃあね、ノア。三ヶ月したらむかえに来るからね」

そして今ノアはハンガリーにいる。ノアはすっかりハンガリーになれたようだ。ぼくはノアにハンガリーが気に入ってもらつてよかったと思う。

「ノア、君がハンガリーに来るためにいろいろなたちが協力してくれたんだよ。感謝しろよ」

と、ぼくは言った。だけどノアは意味がわからなくて、そのままぼくを見ていた。

〈評〉

会話文から作文をはじめると文

そのものに動きが出て、躍動感が出ます。また実際の会話の文を多く入れるとテンポよい展開ができます。でも、あまりに会話を入れすぎると、一番書きたいことが薄れてしまうこともあるので注意が必要です。この点鬼丸君の作文ではバランスよく配分されています。

また、終わりがたも上手です。ノアという犬のぼかんとした表情が見て取れるようです。この一文によって、ノアのためにいろいろと努力した鬼丸君の家族のがんばりが悲壮感無くほのぼのとしたものとして伝わる効果があります。

一度作文を書いたら、少し時間をおいて見直すとよいかもしれません。



佳作

私の道

小学部六年 沼田尚子

「尚子ちゃん、ハンガリーに行っても元気でね。忘れないでね」と書かれた寄せ書きをにぎりしめた。私の心の中は白いきりでつつまれた。

「どうして私だけ全然知らない国に行かなければならないの・・・友達といつも通りに遊んでいる中、私だけいなくなるんだ」

まだ、三年生の私は、ハンガリーという全然知らない国に行かなければならなかった。そして私は全然知らない道を歩くことになった。

でも、こんな私をはげましてくれたのはわたしの大親友。一年生のころから仲良くしていた親友は二人の思い出アルバムを作ってくれた。アルバムには、写真とそのときの様子が一つずつそえられている。それ

を読んでいたらなんだか手がふるえてきて涙が止まらなくなった。そして最後に、「今までありがとう。また五年後に会えるよね」と言い、自分の家をもう一度振り返ってから車に乗った。

「着いたよ」

長い長い時間、初めて飛行機に乗ってわたしは疲れてぐったりとしていた。タクシーから降りた私は、時差ボケで眠い目をこすりながらソファアの上に横たわった。「本当に私はハンガリーにいるの。これは夢だ。さめろ！さめろ！さめろ！」自分がハンガリーにすることが信じられなかった。

「二十一日から英語の学校だからね」

母は私の心とは反対に気軽に話しかけてきた。私の心に大きな傷がついた。

「英語の学校？英語なんて話せないし、アルファベットだって書けな

いよ。行きたくもない道をどうして行かなければならないの。本当に大人は勝手だよ」

いよいよ学校が始まった。初日、自己紹介の紙が配られた。みな、さつさと鉛筆を出し、紙にすらすらと書いた。でも私だけカメのように身を丸めて紙とにらめっこしていた。しばらくして涙が出てきてくちびるをかみしめた。両手のにぎりこぶしを握りしめて、ずっとみなを穴があくように見つめた。私のクラスには日本人の男の子が二人いた。どうやればいいか聞きたかったけど、聞きづらかった。

休み時間に入って、この学校はお菓子を持ってきてきてもいいと教えてもらった。が、私はお菓子を持っていなかった。クラスの子から、「お菓子を持ってきてないの」

と言われた。校庭を一人でぼつんと歩いた。

「さみしいな。友達できないかなあ。

早く日本に帰りたいよ」

とつぶやいていた。

こうしてさみしい一週間が終わり、二週目くらいから他のクラスの日本人の女の子たちと遊んだ。授業の中で一番楽しかったことは、ESLだ。ESLは、英語が少ししか話せない子たちが行くクラス。私と同じくらいレベルの子もいたし、先生も優しいし、お菓子をもらったり、ゲームもしたりした。この時間は私にとっての一番楽しい大切な時間とも言えた。毎日ESLでがんばっていたらいつの間にか英語の力がついていた。日に日に学校が好きになってきた。

五年生に入る少し前、ブダペストに日本人学校ができる聞き、四月から日本人学校に行くか、六月から行くか迷った。私はいずれにしても日本に帰る。やはり日本の勉強は早く取り戻したい。でもアメリカンの友達とすぐ別れるのもつらい。ずっ

と考えたが、結局四月から日本人学校へ行くことにした。

そして自分のいきたい道を歩みだした。今も私の前には長い長い道が待っている。その長い長い道を進むには、少し先のことを考えなければいけないということを私は知った。

〈評〉

大人の視点から考えると、「子供ってこんなことを考えているんだなあ、大人とは視点や思いが違うなあ」と改めて考えさせられます。私たち大人にとっては些細なことでも、子供にとっては「大問題」ということもあるのかもしれない。

この作品は「常体」の文体で統一されて書かれています。「常体」とは文末を「〜だ」「〜である」調で終えることです。この反対には「敬体」といって「〜です」「〜ます」で終わる文体があります。小学校の

高学年や中学生が自分の思い（自分と向き合った作文）を書く場合には「常体」のほうが、思いがストレートに分かり読みやすくなります。また、比喻の表現も上手に使えています。「比喻」とは「〜ようだ」を使ったものです。「カメのように身を丸めて」「穴のあくように」などです。

小学校高学年や中学生では、この表現からあの表現に代えてみようか、と考えることが大切になってきます。これを「推敲」といいます。



詩の部

優秀賞

にける文字

小学部二年 飯川 遙

えい語とハンガリー語を見た
字がにててびっくりした
でもしゃべったらぜんぜんちがつ
た

なんでだろう

ううん

ううん

ふしぎだな

もしかしたら

もしかして

そうだ

えい語とハンガリー語

だけじゃないのかな

ちがう国とちがう国も

にているのかな

そうだそうだ

文字ってよく見ると

こんなにひみつがあるんだな

こんどはじぶんで書いてみよう

俳句の部 佳作

小学部四年 堀部 晋平

夏の夜ドナウに星が映るかな

俳句の部 優秀賞

中学部二年 堀部 和加奈

向日葵や光り輝くドナウ川

俳句の部 佳作

中学部二年 小松 幹

稲妻や行くあてもなく乗るトラム

〈評〉

「韻文」にはさまざまな手法があります。これは詩にも、俳句にもあります。例えば、飯川君の詩では「反復法」が使われています。「ううんううん」「そうだそうだ」と二つあります。強調したり印象を強めたりする効果があります。ただ、これもあるあまり多すぎると逆効果です。だから飯川君くらいの二度繰り返すのがちょうどよさそうです。

飯川君の「反復法」にはさらに秘密が含まれています。「ううん ううん」はきつと考えている様子です。から時間がかかっています。だから二行に渡って書いてあると考えられます。「そうだそうだ」は気づきの言葉です。だから、短時間に発せられる言葉です。だから一行で書いてあると考えました。

また、このように他の人に話すように書くとき、読む方もすつと受け止められます。素直な感じが出ます。さて俳句についてです。日本人は古来より五と七の音数のリズムが好きなんです。だから、「標語を作るましよう」と言われると、つい指を折って音数を数えたりしてしまいますね。そういう意味で俳句は一番短いリズムを持った詩といえるかもしれません。

また俳句は「切れ」の文学といわれています。三つの句に共通した表現技法があります。「かな・や」と

いう「切れ字」を用いていることです。この切れ字を用いることで切れ味鋭い俳句になります。同じ音数でも「だよ」や「は」にするより、ずっとスッキリした感じが出せます。俳句も詩も何回も作っていると、雰囲気がつかめるようになります。日常の中でもふとした瞬間に口に出して、つぶやいてみるといいかもしれません。

ドナウ祭作文

ハンガリーダンスと私の笑顔

小学部六年 久世 優美子

勉強の秋。でもこの期間だけはそれ以上に集中したいものがある。それはドナウ祭へ向けての練習。九月二十日から始まったハンガリーダンスの練習は一回目から汗をかくほどハードで、本番がとても不安になった。自分がある日、ステージに出ら

れたことが夢のようだった。

ハンガリーダンスの練習は週に一回、鈴木先生が日本人学校に来て教えて下さった。本格的に練習が始まると、最初の練習の時にあった不安が楽しさに変化していった。練習で体力を消耗する量も日に日に増え、難易度も徐々に上がってきた。

最後の一週間は飯川先生が作って下さった「ハンガリーダンス・ラストパート計画」にそって練習が進められた。これは朝学習や体育の時間など五・六年生が一緒に練習ができる時間をダンスの練習に当てるというものだった。他の学年が使わない日の音楽室や、作品展示されている二階のわずかなスペースを利用して練習することもあったが、練習回数が増えたことでステップの上達が実感できた。

しかし、この週の水曜日。鈴木さんに見て頂く前にハンガリー語の先生であるエメシェ先生にダンスを見

てもらった。その時の感想が私たちを変えてくれた。

「ダンスは上手だけど笑顔が足りない。ダンスに集中するのも良いことだけど、笑顔で踊らないと楽しそうに見えない」

よく分かっていることだったがこれは簡単そうで難しいものだった。自分の心の中ではとても楽しいと感じていてもついつい下を向いてしまふ。パニックになりながらも「笑顔で踊る」この課題に私は取り組んだ。

夜、頭の中にポツンと一つの考えが浮かんだ。間違えても気にしない。うまく笑えなくてもとにかく前を向いて下を見ない。次の日の練習では、昨夜考えたこのことを試してみた。するとなぜか勇気がわいてきた。

そしてむかえた本番当日。佐藤先生が当日見に来られない鈴木さんたちのメッセージを私たちに伝えてくれてさらに自信がついた。「ステップを間違えないことより、

元氣よく踊ることが重要、そして、楽しく踊ることができれば最高」ハンガリーダンスの時、心の底から笑っていられる自分がステージに立っていた。

ドナウ祭を終えて

中学部一年 兼子健汰

僕は「ドナウ祭」に悔いを残さず終わることができました。今まで、昼休みや家での時間を「ドナウ祭」のために使ってきました。また、準備をみんなできてきました。自分の練習とみんなの準備、それをぶつける本番の日がやってきました。十一月十八日の「ドナウ祭」は最高のものになりました。

和太鼓の説明をハンガリー語で行うのですが、練習したとおりに言うことができませんでした。ほかのみんなも緊張はしていたけれど、自分の説明を言えました。いよいよ演奏です。

演奏中僕は失敗もしてしまったけれど、不思議と悔いは残りませんでした。それをなぜかと考えてみたときに、次のようなことが思い浮かびました。ここまでみんなが練習したのと、ハンガリーという日本から遠い国で日本の和太鼓を演奏していること、そして何よりみんなが楽しく演奏できたからだと思います。

午後のワークショップでは中学部一・二年生は来客者に「豆つかみ」をしてもらうことを企画しました。思ったより人も来てくれましたし、ハンガリーの人も来てくれました。少しだけですが、言葉を交わすこともできました。

「ドナウ祭」でも少し残念なことがあります。それは音楽の発表です。歌にしてもリコーダー演奏にしても、まちがえてしまったところがあるのです。また、リコーダー演奏のときには下も向いてしまっていました。来年になつてしまいますが、

今度こそそういった点を克服したいです。これが次の目標として見えてきました。

和太鼓演奏でも「見てもらう」ということを意識して演奏したいです。それが楽しく思い出に残る来年の「ドナウ祭」となるはずだからです。

ドナウ祭を終えて

中学部三年 三代 鳴美

今回のドナウ祭は私にとって中学校最後のものでした。今回がんばったこと、それは和太鼓です。和太鼓を本格的にたいたのは初めてで、和太鼓グループの高久先生や音楽の坂井先生に一から教えてもらいがんばりました。和太鼓をハンガリー語で紹介することにもチャレンジしました。私は最初こんなに長い内容を覚えることが出来るのだろうかと思いましたが、弱気でした。しかし、仲間の一人ができると自分も負けられないと思い、

自分なりに練習しました。ハンガリー語の難しさを改めて感じました。

ワークショップでは漫才を披露しました。大勢の人を笑わせるということ初めてして、やはり人を笑わせることは難しいと思いました。しかし、たくさんの人が自然に笑ってくれる人を見るとやはりやってよかったと思うし、終わった後に「おもしろかった」と言われると私自身うれしいし、新しい自分を見つけることができたと思います。

今回のドナウ祭は本番までとても大変でしたが、だからこそ自分が成長できたのだと思います。今、日本人学校での二年間を振り返ると、一つ一つの行事が私を成長させてくれたと思います。ドナウ祭を終えて新しいことにチャレンジできて良かったです。和太鼓、ハンガリー語、漫才。次はどんな新しい体験が私を大きくしてくれるか、楽しみです。

ドナウ祭を終えて

中学部三年 八代 大成

文化祭が終わった。僕の中学校生活で最後の文化祭だった。今回、僕が一番力を入れたのは和太鼓だ。もちろんワークショップでの漫才の方も力を抜いていたわけではないが、何ヶ月も前から用意してきたことを思うと、やはり和太鼓が自分の中では一番だ。

僕の担当は平太鼓。これは太鼓の中でも一番繊細だ。こいつは本当に敏感でまるで人間のようだった。他の太鼓がどうっていうことのない湿度の中でも、こいつだけはふやけ、音を響かせるなどといっていられる状態ではなくってしまふ。だからたたくときは毎回細心の注意を払い、十月中頃まで力の加減を体や腕に叩き込んだ。

そしてハンガリー語での和太鼓紹介。元になった日本語の文があまり

に長く、それに伴ってハンガリー語の文が異常に長かったのもいい思い出。暗記は思った以上に難しく、文化祭前日まで僕一人覚えられなかった。が、才能と努力によって本番では完璧に言い切った。頭の中は真っ白だった。演奏の方もパーフェクトだったと思う。最後の札を忘れてしまったが、それもいい経験ということにしておこう。

そして、漫才。思った以上に大人の方々が見に来てくれて笑ってくれた。ネタ合わせの時は「これはうけないかも」と思っていたものが実際にやってみると意外に笑ってくれたりして意外だった。リハーサルの時よりも進行が早く進んでしまったが、客足は途切れることを知らなかった。

自分で言うのもなんだが、和太鼓、漫才共に「有終の美」という言葉にふさわしいくらい素晴らしいものになったと思う。

みどりの丘日本語補習校

学習発表会

五年 山内 規世美

この間の土曜日に学習発表会がありました。各学年色々な事をしました。一年生は絵を描いてそれにお話をつけました。それから「森のくまさん」と「大きなくりの木の下で」を歌いました。二年生は漢字文楽をやりました。四年生は「耳をすます」という詩を朗読し、パントマイムもつけました。私達五年生は詩を暗唱しました。

私が一番初めに司会をしました。最初はざわざわしていたけれど、私が原こうを読み始めると静かになりました。最初、緊張して何だかわかったけど上手く出来てよかったと思いました。

私達の詩の暗唱は最後でした。私は「まだまだ時間があるなあ」と思っていたけれど、すぐに私達の番に

なつてしまいました。どんどん番が近付くにつれてドキドキがいっぱいになってきました。最後には熱くなつてきました。

私達の発表が終わったら、ドキドキがしずまってきたけれど、学習発表会が全部終わるまでドキドキはなくなりませんでした。だけど、無事に終わつてよかったと思つてほつとしました。学習発表会に出てよかったと思います。

二年 茂木 陸

学しゅうはっぴよう会はぶ台のあるへやでありました。

ぼくのクラスは「かん字文楽」をやりました。その「かん字文楽」はふつうの文楽と同じだけど、かん字を作ることががちがいます。うごかすんじゃないくて自分がかん字になるんです。でも森のかん字は出来ませんでした。なぜなら上の木がうかんてるからです。先生は紙に大きな木のかん字を書いて

上の木にしました。それで森のかん字は出来ました。

文楽ができてつかれたけど、すごく楽しかったです。もう一回やりたいです。

二年 ラパイ のりゆき

すつごく楽しい気ぶんだつた。でもちよつとこわかつた。おかあさんがゆかたをもつてこないで、どうしていいかわからなかつたから、とてもしんぱいしていた。ちようどはっぴよう会がはじまる時に、おかあさんがゆかたをもつてきてくれた。早くきがえて、ちよつとはずかしかつた。はじまた時、はじめはよろこんでいたけど、そのうちドキドキしてなにを言わなきゃいけないかわすれそうになつた。

おわつたときうまくできたからうれしくなつて、つぎのはっぴよう会が楽しみになつた。

随想

追悼 ジョージ・シャンドール

石本 裕子

ブダペストへ引越した大きなきっかけは、NYの学生時代。ジュリアード音楽院で師事したジョージ・シャンドールとの出会いであった。先生はハンガリーが誇る偉大な作曲家でピアニストであるバルトークの愛弟子で、同時期にアメリカへ亡命し、NYでバルトークの最期にお立会いになられた数少ないおひとりでもある。

バルトークとシャンドール先生とのレッスン風景は、バルトークハウスの壁面にあり、ご覧になられた方も多いかと思う。シャンドール先生には、音楽院の三年間お世話になっていた。卒業後も折に触れて演奏を聞いていただき、貴重なご指導をいただいた。

音楽院時代は、毎月必ずクラスミ・ディングがあり、人前で演奏をする場が与えられていた。先生は大変強靱な精神と体力の持ち主で、クラスは毎夜遅くまで行われ、若い私たち弟子のほうの体力が続かなくて、眠くなるとソファアの影で隠れて休んだものだった。それでも、時にはご褒美が与えられ、誕生月の弟子たちのお祝いと称して、日本食レストランでご馳走になったこともある。今となっては、たいへん懐かしい思い出で、先生の好物はスキヤキだった。



先生は当時、バルトーク弾きの第一人者で、青年期と晩年の二回に渡ってバルトークピアノ全集をお出しになった。これらの作品もそうだが、レッスン中に先生が目の前で弾いて示してくださった数々のバルトークは、何よりの私の心の財産となっている。とりわけ、民族舞踏に基づいた「リズム感」は圧巻であった。ピアノは打楽器なんだなあとしみじみ思わせる、骨太の手首や大きな手の動きが今でもはっきりと目に浮かぶ。そのしぶきのようなすごさにいつも驚嘆していた。

先生からバルトークの人となりもよく伺った。バルトークの有名なポルトレートは、ちよつと深刻で神経質そうだが、実際は子供好きでやさしい表情の方だったようだ。子供の教育的ピアノ曲集「ミクロコスモス」「子供のために」などの作品も書かれている。

先生の都合で自宅レッスンの日も

多々あり、ある時、不意にかかってきた電話に先生がお答えになった。

「聞いたことのない言葉だなあ・・・ドイツ語じゃないし・・・英語ともまったく違うし。そうだ、これがハンガリー語だ」と感心した。それが今わたしを日々悩ませているハンガリー語との初めての出会いである。

「ブダペストからの電話だよ。今度いっしょに皆で行くか」と言われて、「行きたいです」と元気に答えたものだ。

ブダペストに住むようになって、先生のおっしゃっていた事が、いろいろつながってみえてきた。アメリカ、とりわけNYは人種のるつぼ、さまざまな移民で成り立っているが、先生がアメリカで大きな成功を収められるまで、才能のみならず、どれほどの努力を重ねられ、チャンスを得物にしてきたのか、先生の母国に住んでみて、逆に実感としてわかって

きたように思う。

先生は、一般的にハンガリー人の持つ情緒豊かでちよつと陰鬱な面は一切お見せにならなかった。バルトークのストイックで不遇だった生き方は、先生の反面教師になっているのかもしれないね・・・と弟子同士で話したものである。もつとも若い時代の私たちの物の見方は、単に表面的だったことも否めないが。

先生にお会いした時には、すでにアメリカ生活四〇年という時期で、元氣なアメリカ人そのものだった。でもそれは、もしかして、先生が強く意識的にそうされていただけで、今日 私がこの町で出会う「ハンガリー人」と同じような祖国への誇りを失っていない方だったと思う。ふだんは割り切りの良いさっぱりした人柄だったが、時々、心に秘める想いが顔にでることもあった。それも今となつては懐かしい思い出である。バルトークという作曲家の世界を

深く知り、バルトークを一生弾き続けようと思うに至ったのは、シャンドル先生のお陰である。先生には感謝して余りある。先生は残念ながら一昨年NYで亡くなられた。実り多き九三年の人生を終えられた。先生のバルトークを愛する心を、末席ながら弟子の一人として私も引き継がせていただき、これからも精進していきたい。



日本の出版事情

『コルナイ自伝』出版余話

盛田 常夫

一二月初め、出版社から在庫の報告があった。九月に2刷りが出てちょうど三ヶ月になり、書店で売れ残ったものが出版社に戻ってくる。毎月六〇冊ほど売れています。返本があつて、一二月初めの在庫は前月より増えて三百冊弱です」という。硬質な書物だから、飛ぶように売れるという訳にはいかない。三月の一時帰国で3刷りのお祝いをするのは無理だなということになった。

部数の決め方

六月中旬の発刊と同時に、毎日新聞で経済書の書評担当である中村達也氏（中央大学教授）が取り上げ、七月下旬には日本経済新聞で青木昌

彦氏（スタンフォード大学名誉教授）が読書欄の「この一冊」という大きな枠組みで紹介した。この書評はインパクトがあり、翌日に「アマゾン売上げベストテン」入りした。

初刷りは一三〇〇冊だが、この二つの書評のお陰で、二ヶ月で在庫が尽きた。もともと、このうち三百冊は献本その他で贈ったものだから、実売は千冊である。定価四七〇〇円の高い本だから、初刷りが完売すれば出版社に損は出ない。それも二ヶ月で捌ければ、御の字である。

出版社は初刷りで儲けが出るようにしないと、ビジネスが成り立たない。しかし、専門書はよほどのことがない限り、千部単位で売れることはない。だから、専門書を出そうとすれば、著者の出資を前提しなければならぬ。それが現在の日本の出版事情である。

『コルナイ自伝』のケースも、初刷り部数がなかなか決まらなかった。

部数を少なくすれば定価が上がる。五千円以上になれば、買いたい人も二の足を踏む。かといって、出版社としては、部数を増やして無駄な在庫を抱えるのはコストが嵩む。五千円以下に販売価格が収まるように初刷りの部数が決まった。

予想外の書評

中村氏は一橋大学の都留重人門下で、コルナイへの関心が高く、出版前から問い合わせがあつた。青木昌彦氏はコルナイのスタンフォード大学客員教授時代の同僚で、二〇〇五年秋の国際経済学連合世界大会で次期会長候補として選任された。この大会まで会長を務めたのがコルナイである。この時に、「自伝」の日本語出版の話のコルナイ本人から聞き、書評を約束されたようだ。

青木氏は朝日新聞の経済書書評担当委員だったが、昨年三月で委員交代になった。朝日新聞で取り上げて

もらえると思算段していたので計画が狂った。しかし、思いがけず、青木氏から「日本経済新聞に長い書評文を掲載するように交渉している」というメールが届いて安堵した。

この後、予期せぬ書評が続いた。八月末に朝日新聞で、経済書書評担当の高橋伸彰氏（立命館大学教授）が取り上げてくれた。高橋氏は経済史専攻で分野も世代も異なり、面識もないから、まず書評対象にならないだろうと諦めていたから、これは嬉しかった。

九月には読売新聞で編集委員の布施裕之氏が書評してくれた。実は、佐藤経明氏（横浜市立大学名誉教授）から布施氏が書評することに決まったという連絡を受けていたが、なかなか出なかった。すでに他社の書評が出揃ったから、もう出ないものと考えていた。

意外だったのは、週刊「ダイヤモンド」と「週刊東洋経済」の書評で

ある。「東洋経済」は、一昔前まで理論経済学の特集などもやっていたが、今では両誌ともビジネスマン相手の情報誌である。とくに、一番売れているビジネス週刊誌「ダイヤモンド」が、「職種別・会社別の給料特集号」に、「コルナイ自伝」の書評を載せた。何とも言いようのないアンバランスである。この欄を担当している池田信夫氏（須磨国際学園研究理事）がコルナイ理論を高く評価していることが後になって分かった。

さらに、『文芸春秋』一一号で、猪木武徳氏（京都市立大学名誉教授）が取り上げてくれた。猪木氏とも専門分野が違うし面識はないが、小著『ハンガリー改革史』（一九九〇年刊）を『外交フォーラム』誌で書評していただいことがある。

インターネット塾

発刊から程なくして、日本の友人から、専門ブログの世界で「コルナ

イ自伝」が話題になっているという連絡を受けた。学生に「厨先生」とも通称されているカリスマ先生、稲葉振一郎氏（明治学院大学教授）がブログでさまざまな書物を取り上げて書評している。発刊一週間も経たないうちに「コルナイ自伝」が取り上げられ、絶賛してあった。

「ハンガリーどころか全ての社会主義経済の『改革』に引導を渡し、体制転換への理論的先鞭をつけた著者自身による、主要著作の学説的位置づけと裏事情開陳までを含めた懇切な解説もついていて、社会科学と社会主義、そして二〇世紀に関心のある全ての人にとって必読。四の五と言わず買え。そして読め。数式なんぞ一カ所もないから大丈夫」。

まことに強烈なご託宣である。稲葉氏へのブログには熱心が学生だけでなく、同業の専門家なども意見を寄せている。そこから池田信夫氏のブログにも辿り着いた。稲葉氏は社

会経済学の周辺を渉猟されているが、池田氏は理論経済学やIT分野の書評などを広く手がけていて、「書評の達人」とも称されている。

その他にも、若い先生を中心に、専門ブログの世界が広がっている。これはいわば「インターネット塾」のようなもので、学習・研究意欲のある学生たちが意見を交換する場になっている。現代を象徴するような場の形成である。

在庫がなくなる？

一二月初めの在庫報告から一〇日も経たないうちに、「在庫がなくなりました。これは本当です。3刷りの準備に入ります」という連絡を受けた。一〇日前に三百冊もあったのにどうしてか。「経済週刊誌恒例の年末ベスト経済書に、『自伝』がランキングしたようで、年末フェアをやる書店から注文が相次いで、在庫がなくなりました」という。

この時初めて、「ダイヤモンド」が経済書のランキングを発表しているのを知った。もともと、フェアが終れば返本もあるから、慌てて増刷するのは考えものだったと思うが、出版社としては注文があった時に、在庫がありませんとは言えないのだ。

それにしても、年間千冊は超える経済（ビジネス）関係の新书から、「コルナイ自伝」のような硬派な著作がベストテン入りしたのに正直驚いた。サラリーマンが電車で読むような本ではない。昨秋、堤（元ハンガリー大使）夫妻と東京でお会いした時に、奥様が「書評が出ているから飛ぶように売れているでしょう」と質問されたが、大使が即座に、「飛ぶように売れるほど、日本の知的水準は高くないよ」と答えられていた。ランキングには池田信夫氏の書評が効いていると思う、彼のブログを覗くと、「個人的な二〇〇六年ベスト経済学書」がランクされていて、「コ

ルナイ自伝」が「文句なしの名著」として第一位に掲げられていた。毎日新聞の年末の書評欄でも、中村達也氏が「今年の三冊」の最初に「コルナイ自伝」を上げている。

確かに、理論経済学の分野では他の追随を許さない名著だが、数多くのビジネス書を押しのけて、こんな難しい本が週刊誌のベストテン入りしたのは珍事だ。もともと、投票権を持つ経済学者・エコノミストの中には学生時代にコルナイ理論に出会い、今再びコルナイ経済学の全体像を開示した著作に注目した人々がいると考えれば、ベストテン入りの事情が飲み込める。その場合でも、理論専攻の学者・エコノミストの多くが第一位に投票しなければ、ベストテン入りは難しかっただろう。

理論経済学の世界

一般読者には理論経済学は縁のない世界である。テレビや週刊誌に出

てくるエコノミストの世界とは違う。国際的な学術雑誌で論文著作の引用頻度の多い日本の経済学者ランキングによれば、第一位が雨宮健スタンフォード大学教授、第二位が青木昌彦氏である。雨宮氏などは日本のメディアに出ないから、まず名前を聞いたことのある人は少ないだろう。

雨宮氏は国際基督教大学出身で、スタンフォード大学助手時代に母校に來校し、客員講義を開いた。後にノーベル経済学賞を受賞したアロー・ドブリューの一般均衡モデルを解説する授業で、数学の不動点定理の懇切丁寧な説明が印象的だった。六〇年代から七〇年代にかけて一般均衡論が理論経済学の玉座を占めた。コルナイがその理論的批判書である『反均衡』（邦訳『反均衡の経済学』日本経済新聞社）を一九七一年に出版した。もともと、一般均衡理論の現代数学的基礎を築いたのは、ハンガリー出身の数学者ノイマンで

ある。同じハンガリー人が一般均衡論批判の書を出したことが話題になり、コルナイの名が一躍世界の経済学で知られることになった。

青木氏は「六〇年安保」の全学連のイデオログとして知られている。その後アメリカに渡り、ノイマンが開拓した線型数学的手法を使う計画理論の分野で世界にデビューし、現在も第一線で活躍されている。

不思議な人の縁

六〇年安保当時、東大の玉野井義郎教授の周辺に青木氏などの俊英たちが集まり、その後いろいろな世界に飛び出していった。少し歳月が下るが、国際基督教大学のキャンパスが閉鎖になった学部二年生の春、私は東大駒場に講義を盗み聴きに行った。『マルクス経済学と近代経済学』を出版されたばかりの玉野井教授、教育法の堀尾輝久教授、『歴史としてのスターリン時代』を上梓され

た菊池昌典教授などの講義を覗いた。菊池教授が最初の講義に、「造反有理」という中国文化大革命のスローガンを黒板に記したのに驚いた。この時代は社会も学生も教授陣も皆、熱かった。

人の縁は不思議なもので、後になって堀尾氏とは日本書籍の公民教科書の編集で一緒に仕事することになり、菊池氏からはコルナイ理論講義の誘いを受け、ハンガリーに赴任する直前に駒場で半年の授業を受け持った。玉野井教授のお嬢さんとは法政大学社会学部のコンピュータ授業の教科書作成で一緒に仕事した。

話が脇に逸れたが、コルナイの著作が名著として評価されたのは嬉しい限りである。多分、五〇年いや百年後にも、この著作は読まれるはずだろう。年間八万冊も新刊本がでる日本の出版界で、百年後にも読まれる本はそう何冊もないはずだ。

第七話

ピンキリ

岩井 孝博

ミツチリ・チンチロ・チンチロリン
シツカリ・チンチロ・トンコロリン
流れ板ってのは、流れる度にそのオ、
何かを学んでいるもんです。

学習って言葉があります。

同じ事を何度やっても、自分勝手な
やり方で、同じ間違いをする人を、学
習力がないとか言いますが、自分が学
ぶべき相手を見無視していると、そう
なります。

まずは真似る、まねぶ、そして学ぶ、
なるほど、納得いたします。

千里の道も一歩より。

上手い事を言いました。

一歩があつて二歩目があるんです
から、こりやもう、今更言うまでもな
く、誰でも知ってます。

始めが肝腎とか、終わりよければ総
てよし、なんて言いますが、始めが良
いから途中も良いし、終わりも良いの
であつて、途中が悪いのに、終わりだ
けが良いなんて事はない。

まア、善かれ悪しかれ、始めから終
わりまでが一貫しているのが当たり
前、難しい言葉で言いますと、本末究
境等と言うんですが、これを保ちたい
から、人は言い訳や屁理屈理屈を言う。

しかし、このう、言い訳なんてのは、
言えば言うほど、相手は、は、はアー
ん、言い訳だなんて、すぐ底を見透か
すもんです。

懲りを見た、なんて言いますが、身
に染みて経験をした事を言うわけで

どうやったら見つからないで万引
きをするか、なんてね、懲りない面々
もいるようですが、それなりに学習を
している。

経験を無駄にするな二度ない人生。
学校の先生や親からよく言われる
事ながら、これがなかなか分からない。

流れ板やってたガム公も、話し方に
丸みを持ちたい、人から慕われないと
思うのですが、本人が人を好きになれ
ない。

愛するという脳のパーツが抜けて
いる。

こうした学習は、もう三つ子の魂百
までなんていいいますが、三歳あたりで、
決まるそうです。

でも、まあ、こんな事を考えている
三歳児もいないでしょう。

ガム公なんかは育ちの悪さを知っ
ていますから、隠さず世間を歩いてい
く。

ですからチョコ坊なんかのように、
嫁ぎ先で苦労して、矛先のかわし方を
知った話し方には、憧れる。

半年前、外国での流れ板を切り上げ、
そのチョコ坊の所に転がり込んだガ
ム公。

チョコ坊のツウ・ルームマンション
の、薄日のさす居間のソファから、窓
の外を見ている。ベランダに置いてあ

るススキが、あるか無しの風に揺れ、その向こうの西空に、秋の真つ赤な夕日が尾根にかかつていい風情。

そこへチョコ坊がスルメと焼酎を持ってきて、赤い夕日にどんな昔が見えてるの、なんて気の利いた事を言う。

「焼酎か、癖が無くて、一番いいな」

「お湯で割る、それとも・・・」

「野暮は言うなよ、チョコ坊と飲むのに、お湯は熱過ぎるじゃねエか」

「エ：・バカね、溶けちゃうじゃない」

七〇年代の高倉健と大原麗子がやったら似合いそうな事を二人でやっている。

チョコ坊がクネツと、身を崩してガム公に酌をしようとすると、チャイムが鳴った。

「誰かしら、居留守よ。もう・・・」

「見てからでも遅くはねエさ」

「ん、もう・・・」とチョコ坊、スネ事を言いながら体を立て直し、インターホンの画面を見る。

そこにはグミ助が映っている。

「つたくとか何とか言いながら、顔を見たら文句の二ツや三ツ言ってやろうと思うチョコ坊。オートロックのボタンを外す。」

程なくグミ助が部屋の外に来たんで、ドアを開けると、ヒョイと顔より先に何かが突き出る。

「生ハムとメロン、手土産代わり」と声がして、グミ助の顔が出た。

ロンドンの板前が、有り難う要らない、金欲しい。なんて言ってた奴がいきましたが、心は形に出してこそ通じるようで、チョコ坊素直に頬笑むいい女。「おッ、グミ助かア、まア、来いよ」と奥からガム公の声がして

チョコ坊は生ハムとメロンを冷蔵庫に入れ、かわりにペット・ボトルのアイス・ティーを持って居間に行きます。

「久次郎親方は元気か。どうだその後、お前エは見習いから、見習われてるって気がして来たか」とガム公。

「なんない兄ィ、さっそく嫌味かい」と

グミ助が顔をしかめますと、チョコ坊が

「そうじゃないのよ、グミちゃん、おんなし事やってれば、いつか人の上になつて、責任が出るってことなんだから」

「兄ィの話しは、ついてくのがやつとで、考える暇がねエよ」とそつぽを向いて言うグミ助。

「話とスカートは短い方がいい」とガム公これまたぶっきら棒にいう。

「だから流板やってたんじやないの、ガムちゃんはさ。ねエ」とチョコ坊が訳知りに言う。

「なんだか、俺にはさっぱりだ」とグミ助、首をしねって、手酌酒。

「でも、グミちゃん、こうしてガムちゃん帰って来たんだからね」

「こうして帰ってきたって、どうして帰ってきたんだい、兄ィ」

「良いじゃない、過ぎた昔は、あら、

手土産頂こうかしら」チョコ坊言うなり、サツと立ってキッチンに行きます。残った二人、どこか気まずく、話の糸口を探し、グミ助が

「何があつたんだい、兄イ」と言え

ば
「色んな事あつたもんだなつて思つてよ。赤い夕日と独り言だ」とガム公。

「キザだナア。そらア日本に居たつて色々あんだから、ましてや外国だもんな。極めつけはどんな事あつたんだい」

「ウフ、極めつけ、か」言いながらガム公、俯いてニヤつきます。

「なんだよ、気色悪いな、一人で喜んでちゃつて」とグミ助もつられる。

「なんでも初めての経験でなア、外国語を始め、人から習う事が多かったつて、今更ながら感心してる」と言つてガム公酒をなめるように飲む。

すると間を見たように、チョコ坊が美味しく冷えた生ハムとメロンを切

り分け、艶のあるヘレンドあたりの白い洋皿に美味しく盛つて、運んできた。熱い物は熱い内、冷たい物は冷たい内に、なんて言葉を添え

「昨日より今日、今日より明日、いつも新しい経験じゃないの。さ、冷えてるうちに」とチョコ坊、甲斐甲斐しく二人にナイフとフォークを配る。

「さすが年増、言うことが違うねエ」

「一言多いんだ、手前エは」
ビタツとガム公がグミ助の頭を張つた。

「おやめよガムちゃん、片方が多くて、片方が少ない、足して二でわりや丁度いいじゃない」とチョコ坊がなだめる。

「何でエ、嫌味臭エはしよつた言い方をする兄イなんて嫌れエだ、でもよオ、耳に痛くてチクシヨウつて思つても、明日に繋がつてんだよな、ヒック、極めつけは何でエ、ホームレスにでも、なつたのか」とグミ助、焼酎で、ろれ

つが怪しい。

「なつた。ペット・ボトルが水洗トイレよ。生きる知恵のつく、いい経験だった」とガム公アイス・ティーのペット・ボトルをなでる。

「なつたつて、兄イ・・・俺、酔い醒めつちまつた。ペット・ボトル・・・が、なんでだよ」

「ペット・ボトルの蓋に小さな穴を開けてな、水鉄砲、紙がいらねエ」とガム公言いながら、ク、クククと照れ笑い。

「居るんだねエ、おんなし女が世の中には、ガムちゃん、もうひとつ、ねエ」とチョコ坊が肩摺り寄せてガム公に酌をする。

「ケ、見てらんねエよ。おんなし女が居たからつて、どうなつたんだい」グミ助、ふてて手酌のあおり酒。

とは言つても気になるグミ助。
「・・・チョコお姉さま、おせエて、ねね」なんて、猫なで声を出すもんだから、

「まったく調子のいい酔っ払いだね、いいかい、私とおんなし女がいたって事、忘れんじゃないよ」とチョコ坊が念を押すと

「忘れん、金輪際忘れんから、早く言つてよ」とグミ助すがりつく真似をした。

「ほら、ガムちゃん黒帯じゃない」

「黒帯だア、兵児帯じゃねエのか」

「空手じゃないか馬鹿。空手の先生の娘がさ、キヤラバン持つてて、そこに棲んじやったつてわけよ」

「それとチョコ坊と、どこがおんなしなんだ」とわからないグミ助。

「話はこれからのよ、まったく。その娘、ガムちゃんより三十も下なんだけど、なかなからしく、住まいを請け負ったつて事、出来ヤしないよ」投げようにいうチョコ坊。

「するとなにかい。ホームレスの兄イにそんなに若けエ娘がくつ付いたって事か、そんな時、イギリスの奥さんはどうしてたんだい。第一、兄イここ

に居るじゃねエか」

「奥さんからは三行半、若い娘は親の持つて来た縁談を受け、ガムちゃんには苦笑いかみ殺しての御帰国だったつてわけ」

「上手く出来てやがんナア。ホームレスだったつて、ピンの贅沢だ。俺にも分けてくれよ、兄イ」グミ助がガム公に擦り寄ると、チョコ坊が、昔っから、いい板前には急場を救う陰の女が居るものなのよ、ね。なんて言つてガム公に酒を催促する。

「そんな女、居ねエ俺はどうなんだ」

「見て習つてが、まだ足りねエから削り板。見知らぬ土地で、とぼけてやつてる地元板、てエげエ独りよがりのドブ板だ」とガム公、焼酎を一気飲み。「ヨタ前だのヘタ前、ドブ板なんていう板前さんを支える女、居るかしら」チョコ坊いつて、目の端でグミ助を見ると

グミ助の目が点になっている。

「お前エもナ、呑む買う打つばかりを真似ねエで、包丁人・久次郎親方をしっかり見て真似て、早くピンになれ」

「ハイ、しっかり真似・・・ですが、包丁人と板前つて同じじゃねエのかい」

「違う、よオツク見てりや解る」

「兄イ、俺はピンの下とかキリの上ぐらいにはなつてねエかい」

「手土産にこれ、どうだろなつて金平でも持つて来りやいいが、まだまだキリだ」

ソロソロ一服、アラドッコイ 七話・完



【事務局便り】

新年明けましておめでとうございます。
会員の皆様のご健康とご多幸を祈念致します。
本年もよろしくお願い申し上げます。

二〇〇六年度、日本国内では首相交代、ハンガリーでは総選挙、地方選挙等がありました。当ハンガリー日本人会においても、三年半会長を務めたフジフィルム伊藤氏ご帰任により、七月に会長が期中交代となりました。通算、在ハンガリー生活二十七年を数える田路氏の右に出る方無し！という事で、一九九九年に続き、二度目の会長。二〇〇六年九月に伊藤忠を退社されましたが、今後も当地にて活躍されるとの事、本年も当会会長をお引き受け頂く事となりました。

理事長（会長）

田路 亮三「TBSパートナーズ社」

副理事長

横田 雅也「清水建設事務所」

理事

布目 正浩「丸紅ブダペスト事務所」

小林 孝雄「ジェットロブダペスト事務所」
窪田 豊和「在ハンガリー日本大使館」
（総会終了後、清水建設の社内事情により、当地担当が横田氏に変更となりました。ご了承下さい）

また、当会名誉会長でもある大使の交代もあり、着任早々の鍋倉眞一新大使ご夫妻のご出席を頂き、総会・懇親会が滞りなく行われました。懇親会における初めての試みとしては、食事をビュッフェスタイルとしましたが、参加者よりは好評の声が高かったように感じています。子供さんのいる家族のご参加が例年に比べ少なかったようですが、“佐野友美さんと遊ぶ”に参加した子供達は、とても楽しんでいました。また、福引大会は伊藤忠（ユーラシア・シュペッド）谷垣氏のメリハリある司会により、会場は一喜一憂。最後には“下一桁当選”の再チャンスもあり、お楽しみ頂けた事と確信しています。景品提供にご協力頂きました各社に御礼申し上げます。

二〇〇六年度より運動部は飯尾運動

部長の下、各部会が活動してきました。その様子は、ドナウ通信今号にて紹介されています。また、ソフトボール大会は竹中工務店の守谷氏に、日本人学校共催の運動会においては、住友商事（Summit Agro）の鍬（てつ）氏にお世話係をお願いしました。その他、多くの方のご協力により、各行事が成り立っています。皆様のご協力に、心より御礼申し上げます。今後共、活発な活動ができますよう、皆様のご参加・ご協力をお願い申し上げます。

なお、ご参考までに、二〇〇七年度の活動予定は、次の通りです。（運動部各部会は、幹事に直接お問い合わせ下さい）
五月一三日 第一回ソフトボール大会
六月中頃 巡回健康相談
九月九日 大運動会（日本人学校共催）
九月三〇日 第二回ソフトボール大会
一二月二日 年末総会及び懇親会
各行事の詳細については、大会開催前に順次ご連絡しますので、皆様ドンドンご参加下さい。

（日本人会事務局）

「ドナウ通信第 70 号」（2007 年新春号）

発行者 ハンガリー日本人会

発行年月日 2007 年 1 月 15 日

発行代表者 田路 亮三

編集責任者 盛田 常夫

表紙デザイン さくらデザイン (Inner Design Bt.)

1021 Budapest, Bogár utca 7

写真・裏表紙デザイン Kármán Studio Bt.

日本人会事務局 連絡先

Magyarországi Japánok Szervezete

TEL/FAX: +(36-1)373-0400

1054 Budapest, Zoltán u.13

P.O.Box: 638 H-1365

E-mail: nihonjinkai@nihonjinkai.hu

ドナウ通信編集部

TEL/FAX: +(36-1)361-4469

E-mail: morita@tateyamahu